

## 青年期における劣等感の規定因モデルの構築

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 高坂 康雅

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 佐藤 有耕

Developing the determinant factor model of inferiority feelings in adolescence

Yasumasa Kosaka and Yuhkoh Satoh (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The relationships between inferiority feelings and affiliation motives in adolescences are examined. The participants (n=609) were required to respond to Inferiority Feelings Items and Affiliation Motive Scales. As partial correlations are found between eight inferiority feelings scores and two affiliation motives scores, the eight inferiority feelings scores are compared by grouping them with the two affiliation motive scores. The results indicate that 'sensitivity to rejection' increases inferiority feelings while affiliation tendency decreases them. In addition, the results of our previous study (Kosaka, 2008 et al.) into the relationships between inferiority feelings and four personality characteristics (self-oriented perfectionism, reflection, competitiveness, and affiliation motives) are used to determine a factor model of inferiority feelings in adolescences. The factors that increase or decrease inferiority feelings for each of the four personality characteristics presented in our earlier study are classified according to three dimensions: 1) standards of self estimation, contrasting superiority of others perspective — superiority of self perspective; 2) orientation to interpersonal relationships, contrasting negative — positive; 3) goal setting, contrasting vague — clear. Based on these dimensions, a determinant factor model of inferiority feelings in adolescences is constructed.

**Key words:** feeling of inferiority, adolescences, affiliation motive, determinant factor model

### 問題と目的

青年期における劣等感とパーソナリティ特性との関連に関する研究とその問題点 青年期は他の時期に比べて劣等感が強まる時期である（返田，1986）。Allport（1937）が行った調査では、劣等感を経験したことの無い大学生は、対象者の10%以下であった。また、顔に対する劣等感について調査を実施した落合（1989）でも、対象者のほとんどが劣等感を経験していた。このように、青年期では、多くの青年が劣等感を経験するが、青年すべてが強烈で深刻な劣等感を経験するわけではない。Louttit（1936）は劣等感の兆候として、自己意識の高さや完全主

義、内向性などをあげている。森田療法（高良，1976など）においても、完全主義の者ほど劣等感を感じやすいことが指摘されている。また、筒井（1975）は、競争主義が劣等感を高めると述べている。このように、劣等感を強く感じやすいパーソナリティ特性がいくつか指摘されている。これらの指摘は、“どのような青年が劣等感を強く感じやすいのか”という問いに関する知見を得る上で有用である。

劣等感を強く感じやすいパーソナリティ特性が指摘されているにも関わらず、劣等感とパーソナリティ特性との関連を検討した研究は多くはない（落合，1994）。水野（1979，1980）は劣等感と対人関

係価値観との関連を検討し、劣等感の強い群は同調的であり、劣等感が中程度の群は他者からの承認欲求が高いことを示した。また、安塚（1983）はYG性格検査の劣等感尺度の得点を用いて対象者を2群に分け、YG性格検査の他の尺度得点の比較を行っている。その結果、劣等感尺度得点の高かった群は低かった群よりも、抑うつ性、気分の変化、神経質、客観性の欠如、調和性の欠如、非活動性、思考的内向性、服従、社会的内向性の得点が高いことを示した。さらに、脇屋・玉置（2003）は自己への関心と劣等感との関連を検討し、過去への自己没入が劣等感と関連していることを明らかにし、森津（2007）はネガティブな反すと劣等感との間に正の関連があることを示した。これら以外に、劣等感とパーソナリティ特性との関連をみた研究であるとは言えないが、堂野・野中（1989）は劣等感の強い者は要求水準が高いことを実験で明らかにし、堂野・山中（1988, 1989）は小学生において、劣等感と学習意欲に負の相関があることを示し、星（2006）は劣等感情と自罰的内省性との間に正の相関が、直接的批判性との間には負の相関がみられることを明らかにしている。

劣等感とパーソナリティ特性との関連を実証的に検討する上で重要なのは、劣等感をどのように測定しているかである。上述した研究のうち、水野（1979, 1980）、安塚（1983）、脇屋・玉置（2003）、森津（2007）はYG性格検査の劣等感尺度を用いて劣等感を測定している。しかし、YG性格検査の劣等感尺度はあくまでも性格検査の下位尺度であるため、劣等感を感じやすい性格にどの程度あてはまるのかを測定するものであり、劣等感をどの程度感じているかを測定することはできない。牛島（1948）の劣等感検査も、同様の性質をもったものである。また、堂野・野中（1989）は西平（1964）の自我態度インベントリーを使用している。自我態度インベントリーは身体、才能、性格、社会の4種類と、優越徴候一劣等徴候の5下位尺度から構成されており、「人より運動が苦手だ」、「身長が低すぎる」などの項目に対し、「どの程度感じる（考える）か」と尋ねる形式になっている。岸田（1951）の劣等意識調査項目も同様の形式である。このような項目に対し、「人より運動が苦手だと感じる」や「身長が低すぎると感じる」と回答したとしても、この回答が劣等感を感じていることを意味しているとは限らない。Adler（1930）は劣性を認知したからといって必ずしも劣等感を感じるわけでない指摘している。西平（1964）の自我態度インベントリーや岸田（1951）の劣等意識調査項目では、劣性の認知の程

度は測定できるが、劣等感の程度が測定できているとは言えない。さらに、堂野・山中（1988, 1989）では、YG性格検査の劣等感尺度、牛島（1948）の劣等感検査、岸田（1951）の劣等意識調査項目を参考に作成した項目を使用しており、星（2006）は西平（1964）の自我態度インベントリーをもとに、岸田（1951）の劣等意識調査項目、YG性格検査の劣等感尺度、吉田・吉田・小熊（1987）の劣等感情尺度などから項目を精選して独自の劣等感情尺度を作成している。しかし、既述のとおり、YG性格検査の劣等感尺度や牛島（1948）の劣等感検査は、劣等感を感じやすい性格にどの程度あてはまるのかを測定する尺度であり、西平（1964）の自我態度インベントリーや岸田（1951）の劣等意識調査項目は、劣性をどの程度認知しているかを測定しているものと考えられることから、これらは質的に異なるものを測定していると言える。また、吉田ら（1987）が作成した劣等感情尺度は、劣等感情の“源泉”として、身体的側面、社会・経済的側面、対人関係的側面を設定し、さらに表出水準として意識と行為にわけ項目が作成されているが、分析では、意識と行為の項目をまとめて因子分析を行っているため、最終的に作成された尺度が、劣性の認知を測定しているのか、劣等感の程度を測定しているのか、あるいは劣等感の反応行動を測定しているのか、明確になっていない。堂野・山中（1988, 1989）や星（2003）の劣等感尺度、吉田ら（1987）の劣等感情尺度は、このような質的に異なる項目を収集して作成されているため、その作成手続きからみても、得られた因子の内容からみても、劣等感を適切に測定できているとは判断しにくい。

このように、これまで用いられてきた劣等感尺度は、いずれも劣等感をどの程度感じているかを適切に測定できていない可能性がある。落合（1994）は国内の劣等感研究に大きな進展がみられなかった一因として、劣等感を量的に測定できる尺度が作成されてこなかったことをあげている。

これら劣等感とパーソナリティ特性との関連を検討した研究を総合して何らかの結論を見出そうとしても、用いられている尺度自体の問題以外に、研究間で使用されている尺度が違ったり、相関や $\chi^2$ 検定、共分散構造分析など、異なる統計手法が用いられていたり、あるいは、劣等感得点を独立変数としている研究もあれば従属変数にしている研究もあるという、研究方法の相違という問題がある。これらの相違は、得られた結果を比較したり、総合したりすることを困難にしている。このことは、“どのような青年が劣等感を強く感じやすいのか”という問

いへの回答を、先行研究からは導きにくいことを意味する。

**著者の取り組みと本研究の目的** これらの問題点に対し、著者（高坂，2008a；高坂，2008b；高坂，投稿中；高坂・佐藤，2008）は同一の劣等感項目を用いて、継続的な研究を行っている。まず、高坂（2008a）は劣等感を量的に測定する劣等感項目を作成している。この項目は、「異性ととのつきあいの苦しさ」、「学業成績の悪さ」、「運動能力の低さ」、「家庭水準の低さ」、「性格の悪さ」、「友達づくりの下手さ」、「統率力の欠如」、「身体的魅力のなさ」の8因子で構成されており、すべての項目が「〇〇な自分が人とくらべて劣っていると感じる」という表現になっている。この項目に対して、「とても感じる」から「まったく感じない」で回答を求めることにより、劣等感をどの程度強く感じているかを測定することができている。高坂（2008a）で作成した劣等感項目を用いて、高坂（2008b）では劣等感と自己志向的完全主義との関連を検討し、自己志向的完全主義のなかでも“ミスを過度に気にする傾向”が強い者は劣等感が強く、“自分に高い目標を課する傾向”が強い者は劣等感が弱いことを明らかにしている。また、高坂（投稿中）は劣等感と内省との関連を検討し、自己の否定性を直視することに対して抵抗を強く示している者は劣等感が強く、自己を深くみつめることができる者は劣等感が弱いことを明らかにしている。さらに、高坂・佐藤（2008）は、劣等感と競争心との関連を検討し、“自己アピール”の強い者は劣等感が強く、“向上心”の強い者は劣等感が弱いことを示している。

これら一連の研究は、劣等感を量的に測定できる尺度を用いて、同様の研究方法を用いている。そのため、これらの知見を総合することで、“どのような青年が劣等感を強く感じやすいのか”という問いに答えることができると考えられる。

そこで、本論文では、新たに、劣等感と親和動機との関連を検討した研究を付け加え、著者による4つの研究から得られた知見を総合して、青年期における劣等感の規定因モデルを構築することを目的とする。

**青年期における劣等感と親和動機との関連について** 親和動機とは“他の人と友好的な関係を成立させ、それを維持したいという社会的動機”（速水，1999）である。杉浦（2000）は親和動機を、“拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える”親和傾向と“分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表わし、他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ”拒否不安という2つの性質があるものとし

て捉え、これら2つの下位尺度からなる親和動機尺度を作成している。対人的疎外感を従属変数として、親和傾向と拒否不安を独立変数とした重回帰分析を行った結果、中学生男子を除いて、拒否不安は正の標準偏回帰係数を、親和傾向は負の標準偏回帰係数を示し、ここから、拒否不安を弱め、親和傾向を強めることが、対人関係を適応的にする上で重要であると述べている。

荒木（1999）は、劣等感を“自分は仲間うちから追い出されてしまうかもしれないという恐怖”であると述べている。仲間から追い出されたり拒否されたりすることへの不安を感じると青年は、本音を出さずに表面的、同調的につきあうようになることが指摘されている（大平，1995など）。水野（1979）は、劣等感得点の高い群は同調的であることを明らかにしている。これらの指摘を踏まえると、2種類の親和動機のうち、拒否不安が劣等感と関連していると考えられる。

## 青年期における劣等感と親和動機との関連<sup>1)</sup>

### 目的

青年期における劣等感と親和動機との関連を検討する。

### 方法

**調査対象者** 調査対象者は、宮崎県内の中学1-2年生160名（男子79名，女子81名；平均年齢13.47歳，標準偏差0.53歳），宮崎県内の工業高校1-2年生329名（男子262名，女子67名；平均年齢16.54歳，標準偏差0.53歳），茨城県内の大学生120名（男子68名，女子52名；平均年齢19.64歳，標準偏差1.07歳）であった。

**調査内容** ①劣等感項目：高坂・佐藤（2008）の劣等感項目40項目を使用した。「普段どの程度人と比べて劣っていると感じますか」という教示のもと、「まったく感じない」（1点）、「あまり感じない」（2点）、「どちらともいえない」（3点）、「やや感じる」（4点）、「とても感じる」（5点）の5件法で回答を求めた。

②親和動機尺度：杉浦（2000）が作成した親和動機尺度を使用した。この尺度は「拒否不安」9項目、「親和傾向」9項目、合計18項目で構成されている。「普段のあなたの気持ちや考えにどの程度あ

1) 本調査は、高坂（2008b）と同時に行われた研究であるため、調査対象者や劣等感項目は高坂（2008b）と同一である。

てはまりますか」という教示のもと、「まったくあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「ややあてはまる」(4点)、「とてもあてはまる」(5点)の5件法で回答を求めた。

**調査時期** 調査は2007年3月に実施した。

**実施方法** 中学生、高校生に対しては学級担任などが学級単位で実施した。大学生に対しては講義の一部を使って第二著者が集団で実施したほか、第一著者が個別に配布、回収した。いずれの場合も、調査への協力は任意であること、回答を拒否できることや回答を中断できることなどを質問紙の表紙に明記し、さらに口頭でも伝えた。

## 結果

**劣等感項目の因子分析と得点化** 劣等感項目40項目について、高坂・佐藤(2008)にもとづき因子数を8に指定して、最尤法・promax回転による因子分析を行った結果、高坂・佐藤(2008)と同様の8因子構造が確認された(Table 1)。そこで、第1因子から順に、「運動能力の低さ」、「学業成績の悪さ」、「異性とのつきあいの苦手さ」、「家庭水準の低さ」、「性格の悪さ」、「友達づくりの下手さ」、「統率力の欠如」、「身体的魅力のなさ」と命名した。次に、各因子に.30以上の負荷量を示した項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、.84から.91と十分な内的一貫性が確認されたため、各因子に.30以上の負荷量を示した項目の平均得点を算出して、各下位尺度得点とした(第1因子「運動能力の低さ」の得点を「運動能力の低さ」得点と呼ぶこととし、第2因子以降も同様とする)<sup>2)</sup>。

**親和動機尺度の因子分析と得点化** 親和動機尺度項目18項目について、杉浦(2000)にもとづき因子数を2に指定して、最尤法・promax回転による因子分析を行った結果、杉浦(2000)と同様の2因子が抽出された(Table 2)。第1因子は杉浦(2000)の「親和傾向」の項目が集まり、第2因子は「拒否不安」の項目が集まったため、第1因子を「親和傾向」、第2因子を「拒否不安」と命名した。各下位尺度項目9項目で $\alpha$ 係数を算出したところ、「親和傾向」が.90、「拒否不安」が.84と、それぞれ十分な内的一貫性が確認されたため、各下位尺度項目の平均を算出し、「親和傾向」得点と「拒否不安」得

点とした。

**劣等感8得点と親和動機2得点の偏相関** 「親和傾向」得点と「拒否不安」得点の間に中程度の相関( $r = .58$ )がみられたことから、一方を制御変数として、劣等感8得点との偏相関係数を算出した(Table 3)。その結果、「親和傾向」得点は、「運動能力の欠如」得点( $r = -.13, p < .01$ )、「異性とのつきあいの苦手さ」得点( $r = -.22, p < .001$ )、「家庭水準の低さ」得点( $r = -.28, p < .001$ )、「友達づくりの下手さ」得点( $r = -.34, p < .001$ )、「統率力の欠如」得点( $r = -.26, p < .001$ )、「身体的魅力のなさ」得点( $r = -.19, p < .001$ )との間に有意な負の偏相関を示した。「拒否不安」得点は、劣等感8得点すべてとの間に有意な正の偏相関を示した(「運動能力の欠如」得点 $r = .13, p < .01$ ;「学業成績の悪さ」得点 $r = .23, p < .001$ ;「異性とのつきあいの苦手さ」得点 $r = .22, p < .001$ ;「家庭水準の低さ」得点 $r = .23, p < .001$ ;「性格の悪さ」得点 $r = .12, p < .01$ ;「友達づくりの下手さ」得点 $r = .28, p < .001$ ;「統率力の欠如」得点 $r = .28, p < .001$ ;「身体的魅力のなさ」得点 $r = .21, p < .001$ )。

**親和動機2得点による群分けと劣等感得点の比較** 親和動機2得点について、それぞれの平均(「親和傾向」得点:3.80、「拒否不安」得点:3.47)をもとに、対象者をH群とL群に分け、それらを組み合わせ、対象者を4群に分けた(例えば、HL群は「親和傾向」得点が平均以上で「拒否不安」得点が平均以下だった群を意味する)。

次いで、親和動機の群を要因として、劣等感8得点について、一要因分散分析を行った(Table 4)。その結果、「性格の悪さ」得点を除く7得点で要因の効果が有意であった(「運動能力の低さ」得点 $F_{(3,633)} = 2.86, p < .05$ ;「学業成績の悪さ」得点 $F_{(3,633)} = 4.19, p < .01$ ;「異性とのつきあいの苦手さ」得点 $F_{(3,633)} = 4.58, p < .01$ ;「家庭水準の低さ」得点 $F_{(3,633)} = 6.32, p < .001$ ;「友達づくりの下手さ」得点 $F_{(3,633)} = 12.27, p < .001$ ;「統率力の欠如」得点 $F_{(3,633)} = 8.48, p < .001$ ;「身体的魅力のなさ」得点 $F_{(3,633)} = 5.91, p < .01$ )。そこで、多重比較(Tukey法5%水準)を行ったところ、「運動能力の低さ」得点と「異性とのつきあいの苦手さ」得点では、LH群がHL群よりも得点が高かった。「家庭水準の低さ」得点では、HL群が、他の3群よりも得点が低かった。「友達づくりの下手さ」得点では、LH群が他の3群よりも得点が高く、またLL群がHL群よりも得点が高かった。「統率力の欠如」得点と「身体的魅力のなさ」得点では、LH群が他の3

2) ただし、3「消極的な自分」は第7因子と第8因子に.30以上の負荷量を示していたため、先行研究や負荷量の高さから、第7因子の項目とし、第8因子の $\alpha$ 係数や得点の算出には含めなかった。

Table 1 劣等感項目の因子パターン（最尤法・promax回転後）と平均（標準偏差）

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	A <sup>2</sup>	平均(標準偏差)
<b>第1因子：運動能力の低さ</b>										
13：運動神経が鈍い自分（運動）	.89	-.04	.03	.01	.02	-.05	-.03	.07	.82	2.77(1.26)
30：運動オンチな自分（運動）	.85	-.02	-.05	.05	-.04	.12	.00	-.01	.79	2.50(1.29)
1：スポーツが苦手な自分（運動）	.80	-.11	-.01	-.14	-.06	.04	.11	.10	.70	2.80(1.29)
38：運動がなかなかうまくならない自分（運動）	.76	.10	-.03	.09	.06	.03	.01	-.08	.68	2.67(1.28)
4：走るのが遅い自分（運動）	.67	.00	.05	-.06	.03	-.18	.05	.22	.58	2.82(1.26)
<b>第2因子：学業成績の悪さ</b>										
14：成績が悪い自分（学業）	.04	.89	.07	-.05	.06	-.08	-.04	.01	.81	2.93(1.23)
23：頭がよくない自分（学業）	-.05	.87	.00	.02	-.05	.02	.02	.06	.78	2.94(1.24)
39：学力が低い自分（学業）	.03	.86	.01	.02	.04	.00	.01	-.07	.78	2.80(1.26)
32：試験の結果がよくない自分（学業）	-.06	.83	-.06	.00	-.05	.14	-.02	.03	.69	2.90(1.22)
5：勉強ができない自分（学業）	-.04	.81	-.04	-.02	.01	-.07	.09	.12	.73	3.07(1.28)
<b>第3因子：異性とにつきあいが苦手な自分</b>										
26：異性とにつきあいが苦手な自分（異性）	.01	.01	.91	-.05	-.02	.04	.00	-.01	.83	2.72(1.23)
29：異性にうまく声をかけられない自分（異性）	-.01	-.03	.89	.04	.00	-.06	.03	-.01	.76	2.65(1.26)
35：異性と仲良くなれない自分（異性）	.01	.06	.84	.03	-.02	.20	-.06	-.15	.83	2.60(1.24)
7：異性と話すのが苦手な自分（異性）	-.11	-.02	.76	.04	-.07	-.10	.17	.11	.66	2.82(1.25)
20：異性と親密な関係をつくれぬ自分（異性）	.09	-.03	.76	-.07	.07	.06	-.06	.00	.64	2.77(1.25)
<b>第4因子：家庭水準の低さ</b>										
37：親が立派でない自分（家庭）	.03	-.02	-.05	.91	-.04	-.02	.12	-.10	.77	1.77(0.97)
25：親の学歴がよくない自分（家庭）	.02	.03	-.07	.76	-.08	.08	-.01	-.02	.58	1.71(0.94)
33：家があまり裕福でない自分（家庭）	-.02	.00	.03	.73	-.02	.00	-.03	.17	.63	2.07(1.10)
10：親の仕事に自慢できない自分（家庭）	-.06	-.01	-.01	.72	.06	-.06	.00	.12	.55	1.88(1.06)
16：家庭環境がよくない自分（家庭）	-.07	-.03	.12	.69	.13	-.04	-.02	.03	.58	2.08(1.13)
<b>第5因子：性格の悪さ</b>										
12：悪口を言ってしまう自分（性格）	.01	.00	.09	.00	.84	-.15	-.07	-.02	.60	2.91(1.11)
8：人のせいにしてしまう自分（性格）	-.08	-.01	.02	-.09	.71	.03	.09	.09	.57	2.79(1.15)
19：いじわるな自分（性格）	.04	-.02	-.04	.12	.69	.12	-.04	-.03	.58	2.55(1.13)
15：人を思いやるのができない自分（性格）	.12	.05	-.04	-.01	.65	.15	-.04	-.13	.52	2.63(1.09)
22：うそをついてしまう自分（性格）	-.08	-.02	-.10	.02	.64	.00	.13	.04	.44	2.78(1.11)
<b>第6因子：友達づくりの下手さ</b>										
31：仲のよい友人がつかぬ自分（友達）	.05	.08	-.01	.08	.00	.77	-.04	-.10	.62	2.22(1.12)
27：友達グループにうまく入れない自分（友達）	.01	.01	.08	-.07	-.07	.76	.05	.05	.67	2.56(1.18)
34：うまく友人と話せない自分（友達）	.04	-.01	.06	.10	-.02	.76	-.02	-.10	.64	2.26(1.12)
18：友達づきあいが下手な自分（友達）	-.07	-.02	.01	-.04	.06	.74	.03	.17	.70	2.64(1.20)
9：うまく人間関係がつかぬ自分（友達）	-.07	-.04	-.01	-.09	.13	.67	.05	.15	.58	2.81(1.23)
<b>第7因子：統率力の欠如</b>										
36：リーダーシップがない自分（統率）	.10	.04	.04	.05	-.04	.01	.82	-.15	.74	2.84(1.22)
6：人に指示が出せない自分（統率）	.07	.05	.06	-.01	.07	-.21	.79	.04	.67	2.89(1.18)
40：グループをまとめられない自分（統率）	.04	.04	.06	.09	.02	.10	.68	-.18	.63	2.72(1.16)
21：自分の意見がはっきり言えない自分（統率）	-.08	-.03	-.05	-.03	.03	.21	.67	.09	.60	2.95(1.22)
3：消極的な自分（統率）	-.01	-.07	.01	-.04	-.04	.18	.38	.30	.41	3.00(1.16)
<b>第8因子：身体的魅力のなさ</b>										
11：スタイルがよくない自分（身体）	.18	.02	-.01	-.03	-.02	.03	-.04	.66	.59	2.88(1.26)
24：太っている（やせている）自分（身体）	.18	.11	-.10	.06	-.02	-.01	-.07	.63	.57	2.67(1.29)
17：顔が丸い（細い）自分（身体）	.02	-.01	.02	.25	-.01	.03	-.06	.60	.53	2.34(1.17)
2：かっこよくない（かわいくない）自分（身体）	.16	.10	.10	-.09	.06	.02	.01	.51	.55	3.26(1.14)
28：体つきが男（女）らしくない自分（身体）	.13	-.02	.13	.23	-.01	.11	-.07	.33	.45	2.36(1.22)
因子間相関（左下）・得点間相関（右上）	運動	学業	異性	家庭	性格	友達	統率	身体		
	運動	-.40	.46	.31	.33	.51	.52	.65		
	学業	.41	-	.35	.27	.40	.40	.46		
	異性	.46	.37	-	.42	.36	.64	.61		
	家庭	.32	.30	.45	-	.35	.47	.34		
	性格	.32	.45	.36	.35	-	.53	.45		
	友達	.51	.40	.63	.50	.54	-	.64		
	統率	.50	.48	.59	.31	.45	.61	-		
	身体	.59	.47	.50	.37	.39	.51	.46	-	
負荷量が.30以上の項目のα係数	.91	.93	.93	.88	.84	.89	.86	.84		

注) 項目後の「が人とくらべて劣っていると感じる」は省略した

注) 項目後の( )内は高坂・佐藤(2008)での因子名(略称)

注) 負荷量.30以上を太線で囲った

Table 2 親和動機尺度の因子パターン（最尤法・promax回転後）と平均（標準偏差）

項目内容	F1	F2	$h^2$	平均（標準偏差）
<b>第1因子：親和傾向</b>				
6：人と深く知り合いたい（親和）	.84	-.11	.60	3.73(1.06)
11：知り合いが増えるのが楽しい（親和）	.75	-.03	.53	3.96(1.06)
5：友達には自分の考えていることを伝えたい（親和）	.74	-.11	.46	3.81(1.00)
2：人とつきあうのが好きだ（親和）	.73	-.19	.40	3.55(1.10)
10：友達と喜びや悲しみを共有したい（親和）	.72	.02	.53	3.76(1.07)
3：友人とは本音で話せる関係でいたい（親和）	.72	.00	.51	4.07(1.01)
13：できるだけ多くの友達を作りたい（親和）	.69	.10	.57	4.00(1.03)
14：友達と非常に親密になりたい（親和）	.67	.10	.55	3.68(1.05)
17：一人であるよりも人と一緒にいたい（親和）	.44	.31	.47	3.62(1.13)
<b>第2因子：拒否不安</b>				
9：誰からも嫌われたくない（拒否）	.06	.73	.60	3.66(1.17)
7：できるだけ敵は作りたくない（拒否）	-.01	.68	.46	3.95(1.13)
8：友達と対立しないように注意している（拒否）	-.09	.67	.38	3.64(1.08)
4：どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない（拒否）	-.04	.64	.38	3.61(1.04)
15：仲間はずれにされたくない（拒否）	.20	.62	.57	3.94(1.05)
1：仲間から浮いているように見られたくない（拒否）	-.04	.58	.31	3.35(1.12)
12：みんなと違うことはしたくない（拒否）	-.22	.54	.19	2.53(1.08)
16：一人であることで変わった人と思われたくない（拒否）	.01	.54	.30	3.09(1.33)
18：一人ぼっちでいたくない（拒否）	.29	.43	.42	3.45(1.18)
因子間相関	.63			
得点間相関	.58			
各因子に.40以上の負荷量を示した項目の $\alpha$ 係数	.90	.84		

注) 項目後の ( ) は、杉浦 (2000) の因子分析結果を表している。親和：親和傾向、拒否：拒否不安  
 注) 得点間相関は0.1%水準で有意である

Table 3 劣等感8得点と親和動機2得点の偏相関

劣等感 親和動機	運動能力 の欠如	学業成績 の悪さ	異性との つきあひ の苦しさ	家庭水準 の低さ	性格の 悪さ	友達づくり の下手さ	統率力の 欠如	身体的 魅力の なさ
親和傾向	-.13**	-.08+	-.22***	-.28***	-.07+	-.34***	-.26***	-.19***
拒否不安	.13**	.23***	.22***	.23***	.12**	.28***	.28***	.21***

注) + $p < .10$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

群よりも得点が高かった。「学業成績の悪さ」得点では、多重比較の結果、有意な差はみられなかった。

### 考察

劣等感8得点と親和動機2得点の偏相関を算出したところ、「親和傾向」得点は劣等感6得点と有意な正の偏相関を示し、「拒否不安」得点は劣等感8得点と有意な負の偏相関を示した。また、親和動機2得点の平均をもとに対象者を4群に分け、劣等感得点の比較を行ったところ、多くの劣等感得点で、LH群が高く、HL群が高いことが明らかになった。

これらの結果から、親和動機のなかでも、拒否不安が強い者は劣等感が強く感じ、親和傾向が強い者は劣等感をそれほど強くは感じていないと考えられる。これは、当初の予測と一致するものであり、拒否不安を弱め、親和傾向を強めることによって、对人的疎外感だけではなく、劣等感を低減させることができると言えよう。

### 青年期における劣等感の規定因モデルの構築

青年期における規定因モデルの構築 本論文で検討

Table 4 親和動機4群ごとの劣等感8得点の平均(標準偏差)と分散分析結果

劣等感得点	対象者全体 (607名)	LL群 (221名)	HL群 (98名)	LH群 (78名)	HH群 (210名)	分散分析結果
運動能力の低さ	2.71 (1.09)	2.70 (1.01)	2.54 (1.19)	3.02 (1.22)	2.69 (1.07)	2.86(3,603)* LH > HL
学業成績の悪さ	2.92 (1.10)	2.80 (0.96)	2.72 (1.24)	3.13 (1.15)	3.07 (1.12)	4.19(3,603)** -
異性とのつきあいの 苦手さ	2.71 (1.09)	2.70 (0.98)	2.45 (1.14)	3.06 (1.04)	2.70 (1.16)	4.58(3,603)** LH > HL
家庭水準の低さ	1.90 (0.86)	2.00 (0.86)	1.59 (0.80)	2.05 (0.81)	1.89 (0.87)	6.32(3,603)*** LL・LH・HH > HL
性格の悪さ	2.74 (0.87)	2.72 (0.80)	2.71 (0.91)	2.83 (0.90)	2.73 (0.92)	n.s.
友達づくりの下手さ	2.50 (0.97)	2.59 (0.89)	2.12 (0.94)	2.94 (0.91)	2.40 (1.02)	12.27(3,603)*** LH > LL・HL・HH, LL > HL
統率力の欠如	2.88 (0.95)	2.86 (0.85)	2.71 (0.99)	3.37 (0.98)	2.81 (0.99)	8.48(3,603)*** LH > LL・HL・HH
身体的魅力のなさ	2.71 (0.95)	2.71 (0.87)	2.46 (0.95)	3.05 (0.97)	2.69 (0.99)	5.91(3,603)** LH > LL・HL・HH

注) 全体平均よりも高かったものには網掛けをした

注) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 5 各パーソナリティ特性の劣等感を強める側面と弱める側面

パーソナリティ特性	側面	劣等感を強める側面	劣等感を弱める側面
自己志向的完全主義(高坂, 2008b)		・ミスを過度に気にする傾向	・自分に高い目標を課する傾向
自省(高坂, 投稿中)		・否定性直視への抵抗	・内省水準の深さ
競争心(高坂・佐藤, 2008)		・自己アピール	・向上心
親和動機(本論文)		・拒否不安	・親和傾向

した親和動機との関連も含め、これまで著者が行ってきた研究(高坂, 2008b; 高坂, 投稿中; 高坂・佐藤, 2008)によって明らかになった劣等感を強める側面と弱める側面をTable 5にまとめた。

落合(1995)は、青年心理を理解する観点として、“外的次元”、“内的次元”、“発達的变化の次元”という3つの観点をあげている。また、“外的次元”は青年が自分自身に向き合っている側面である“対自的側面”、自分ではない他のものに関わる側面である“対他的側面”、そして、自分自身をどのくらい長い時間の中で位置づけることができているかに関する“時間的展望の側面”という3つの側面に分けられている。さらに、“内的次元”は“知識・認知”、“感情”、“意思決定”という3つの側面に分けられ、“外的次元”の3側面と“内的次元”の3側面を組み合わせさせた統合的な表(詳細は落合(1995, pp.18-19)を参照)を提示している。これを見る

と、“外的次元”の3側面と“内的次元”の“感情”の側面が組み合わせられてできるセルには、いずれも劣等感が書き入れられている。ここから、Table 5に表した4つのパーソナリティ特性における劣等感を強める側面と弱める側面は、落合(1995)が提示した“外的次元”における“対自的側面”、“対他的側面”、“時間的展望の側面”という3つの側面からまとめなおすことができると考える。そこで、Table 5をこれら3つの側面からまとめなおしたものが、Table 6である。

まず、“対自的側面”における劣等感を強める側面としては、競争心の“自己アピール”と自省の“否定性直視への抵抗”があげられる。“自己アピール”は、競争をすることや競争で勝つことによって、他者からの承認や賞賛を得ようとするものである。また、“否定性直視への抵抗”は、自己の否定的な側面をみつめることに対する抵抗を表してお

Table 6 外的次元3側面から捉えなおした各パーソナリティ特性の劣等感を強める側面と弱める側面

外的次元	側面		
	次元		
対自的側面	自己評価の基準	劣等感を強める側面	劣等感を弱める側面
		他者視点優位 ・自己アピール(競争心) ・否定性直視への抵抗(内省)	自己視点優位 ・内省水準の深さ(内省)
対他的側面	他者との関係志向	消極的關係志向 ・ミスに過度に気にする傾向(完全) ・拒否不安(親和動機)	積極的關係志向 ・親和傾向(親和動機)
		時間的展望の側面	明確な目標設定 ・自分に高い目標を課する傾向(完全) ・向上心(競争心)
	目標設定	(漠然とした目標設定あるいは目標のなさ)	

注) ( ) 内はパーソナリティ特性を表し、(完全)は自己志向的完全主義を表す。

り、この抵抗が自己をしっかりみつめることから青年を遠ざけている。これら2つの要因は、自分で自分をみつめることなく、他者からの承認や賞賛によって自己を理解したり評価したりしようとするものであると考えられる。

一方、“対自的側面”における劣等感を弱める側面としては、内省の“内省水準の深さ”があげられる。これは、劣等感を強める側面の2つとは反対に、自分で自分のことをしっかりとみつめ、理解・評価しようとするものである。つまり、“対自的側面”における劣等感を強める側面と弱める側面は、自己を評価する上で、他者の視点が優位となっているか、自己の視点が優位になっているかに対応していると考えられる。

次に、“対他的側面”における劣等感を強める側面としては、自己志向的完全主義の“ミスに過度に気にする傾向”と親和動機の“拒否不安”があげられる。“拒否不安”は既述のように、他者からの拒否に対する恐れを要素をもつ親和動機であり、他者との関係においても消極的・同調的なつきあい方がなされるものである。“ミスに過度に気にする傾向”は、“ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう”や“人前で失敗することなど、とんでもないことだ”のような項目などから構成されていることから、ミスをすることによって他者からの評価が下がったり、拒否されたりすることへの懸念が含まれていると考えられる。これは“拒否不安”と類似した内容であり、拒否されることに対する恐れや不安から他者との関係への取り組みが消極的になっていることが、“対他的側面”における劣等感を強める側面の共通点としてあげられる。

“対他的側面”における劣等感を弱める側面としては、親和動機の“親和傾向”があげられる。親和傾向は、拒否される恐れなしに積極的に他者と関わろうとするものであり、劣等感を強める側面である

他者との消極的な関わり方とは相反するものである。

“時間的展望の次元”における劣等感を強める側面に相当するパーソナリティ特性の側面は、これまで行ってきた4つの研究では見出されていないが、劣等感を弱める側面としては、自己志向的完全主義の“自分に高い目標を課する傾向”と競争心の“向上心”があげられる。これらはいずれも、自己を高めようとして明確な目標を設定していることを表している。高坂(2008a)は、“人間的成熟”という将来に目を向けた領域が自己の重要領域になると劣等感が低減することを明らかにしている。この知見も含めると、明確な目標設定ができていたことが、“時間的展望の次元”において劣等感を弱める側面に共通していると言えるだろう。ここから、これまでの研究では扱っていないが、“時間的展望の次元”において劣等感を強める側面としては、目標設定が漠然としていたり、目標そのものをもてないことであると推測できる。

以上から、これまでの研究において明らかになった4つのパーソナリティ特性における劣等感を強める側面と弱める側面は、“対自的次元”として自己評価の基準が他者視点優位であるか自己視点優位であるか、“対他的次元”として他者との関係志向が消極的關係志向であるか積極的關係志向であるか、“時間的展望の次元”として目標設定が漠然としているか明確であるか、という3点にまとめられ、自己評価の基準が他者視点優位であり、他者との関係志向が消極的であり、目標設定が漠然としている青年ほど、劣等感を強く感じやすいと考えられる。Fig. 1はこれらをまとめた、青年期における劣等感の規定因モデルである。これは、西平(1979)や大野(1984)の“心情モデル”を参考に、劣等感の規定因である3側面を対応させたものである。

今後の課題 本論文では、著者が行ってきた劣等感と4つのパーソナリティ特性との関連に関する研究



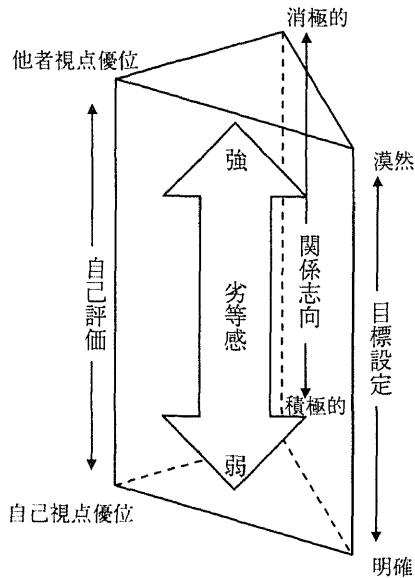


Fig. 1 青年期における劣等感規定因モデル

で明らかになった劣等感を強める側面と弱める側面をまとめ、青年期における劣等感の規定因モデルを提示した。これによって、測定尺度の問題や研究間の研究方法の違いによって先行研究では明確にされてこなかった“どのような青年が劣等感を強く感じやすいのか”という問いに対して、本論文では、ひとつの答えを提示することができた。

一方で、本論文で提示した規定因モデルについては、それを構成する3側面を直接測定したわけではなく、落合(1995)の“外的次元”の3側面に、これまでの著者が行ってきた研究結果を対応させて構築したものであり、仮説的なものである。今後は3側面を直接測定する尺度を作成し、このモデルの妥当性を検討することが必要であろう。

### 引用文献

- Adler, A. (1930). *The education of children*. New York; Greenberg Publisher. (アドラー, A. 岸見一郎(訳)(1998). *子どもの教育* 一光社)
- Allport, G.W. (1937). *Personality*. New York; Henry Holt. (オルポート, G.W. 託摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正(訳)(1982). *パーソナリティ* 新曜社)
- 荒木創造(1999). *劣等感にとりつかれた人々* 東京書籍
- 堂野佐俊・野中陽子(1989). *自我態度と要求水準に関する一研究—劣等感・優越感と要求水準—*

広島文教女子大学紀要, 24, 47-59.

- 堂野佐俊・山中幸子(1988). *児童の劣等感と学習意欲の相関的研究(その1)—現代の児童における劣等感分析—* 広島文教教育, 3, 27-40.
- 堂野佐俊・山中幸子(1989). *児童の劣等感と学習意欲の相関的研究(その2)—劣等感と学習意欲との関係—* 広島文教教育, 4, 33-44.
- 速水敏彦(1999). *親と動機* 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司(編) *心理学辞典* 有斐閣 p. 462.
- 星あずさ(2006). *劣等感情および優越感情の構造の探索的研究—攻撃性との関連性を含めた検討—* 関西大学心理相談室紀要, 7, 61-70.
- 岸田元美(1951). *児童における劣等性意識とその要因* 児童心理, 5(9), 66-75.
- 高良武久(1976). *森田療法のすすめ* ノイローゼ克服法 白揚社
- 高坂康雅(2008a). *自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達の变化* 教育心理学研究, 56, 218-229.
- 高坂康雅(2008b). *青年期における劣等感と自己志向的完全主義との関連* パーソナリティ研究, 17, 101-103.
- 高坂康雅(投稿中). *青年期における内省への取り組み方の発達の变化と劣等感との関連* 青年心理学研究.
- 高坂康雅・佐藤有耕(2008). *青年期における劣等感と競争心との関連* 筑波大学心理学研究, 35, 41-48.
- Louttit, C.M. (1936). *Clinical psychology: a handbook of children's behavior problems*. New York; Harper.
- 水野ひとみ(1979). *劣等感が対人関係に及ぼす影響について(1)* 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要, 24, 47-59.
- 水野ひとみ(1980). *劣等感が対人関係に及ぼす影響について(2)—集団への適応過程に及ぼす劣等意識の影響—* 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要, 25, 7-14.
- 森津 誠(2007). *学生のネガティブな反すうと劣等感および自尊心との関係—「やる気」理解のための一考察—* 国際研究論叢, 20(2), 63-70.
- 西平直喜(1964). *青年分析* 大日本図書
- 西平直喜(1979). *青年期における発達の特徴と教育* 大田 堯・岡本夏木・坂元忠芳・園原太郎・滝沢武久・波多野諠余夫・堀尾輝久・村井潤一・山住正己(編) *子どもの発達と教育* 6

- 岩波書店 pp. 1-56.
- 落合良行 (1989). 青年期にみられる顔に対する劣等感の分析 日本教育心理学会第31回総会大会発表論文集, 224.
- 落合良行 (1994). 青年期を中心とした生活感情の研究 橋口英俊・稲垣佳世子 (編) 児童心理学の進歩—1994年版— 金子書房 pp. 195-226.
- 落合良行 (1995). 生涯発達心理学の観点からみた青年期 落合良行・楠見孝 (編) 自己への問い直し—青年期— 金子書房 pp. 1-21.
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波新書
- 大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 返田 健 (1986). 青年期の心理 教育出版
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達の变化— 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 筒井健雄 (1975). 子どもが劣等感を抱く「とき」 児童心理, 29(11), 43-50.
- 牛島義友 (1948). 不良化傾向の早期発見：性格の評定尺度の検査法 金子書房
- 脇屋素子・玉置 賢 (2003). 自己への関心と劣等感との関連性 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 58, 173-183.
- 安塚俊行 (1983). 劣等感の構造 (2) — YG 性格検査の分析 幾徳工業大学研究報告 A 人文社会科学編, 7, 53-57.
- 吉田信仁・吉田昭久・小熊 均 (1987). 現代青少年の心理ダイナミズムの特徴—大学生における主観的感情としての「優劣感情」を指標として— 茨城大学教育学部教育研究所紀要, 19, 53-68.

(受稿 9 月 30 日：受理 11 月 19 日)